1　死刑台のエレベーター

一九九〇年初め、フランスの女優ジャンヌ・モローが来日した。フランス語の語りだけで観客の心をとらえる、特異な演出の戯曲『ゼルリンヌの物語』で小間使いの老嬢を演じたのである。ジャンヌ・モローといえば、忘れ難いのがヌーヴェル・ヴァーグの先陣を切った名作『死刑台のエレベーター』であった。マイルス・デーヴィスの音楽が全篇に流れるなか、恋人を求めて夜の街を歩く不倫の妻ジャンヌ・モローの姿は、若き鬼才ルイ・マル監督がサスペンスとどんでん返しを静かに描く大都会を舞台にして、観客に焼けつくような情感を与えた。

『禁じられた遊び』の子役ジョルジュ・ブージュリーがすでに若者に成長し、この作品で犯罪者を演じたのも、映画ファンにとっては大きな衝撃であった。『死刑台のエレベーター』には、モーリス・ロネとリノ・ヴァンチュラを加えて、見事なキャストが揃っていた。フランスの映画界は、文字通りこのニュー・ウェーブをヌーヴェル・ヴァーグと呼んで歓迎し、それまでのフランス映画の通念を一変させた。わが国ではその空気だけを呼吸したが、実はそのシナリオの冒頭に起こる殺人事件は、フランス人が忘れることのできない二大侵略、イ

ンドシナ戦争とアルジェリア戦争で財を成した実業家カララという人物が殺されるという設定であった。

この映画が公開されて間もなくドゴール大統領の第五共和制が誕生したのである。時あたかも、実業家カララを犯罪者として抹殺する『死刑台のエレベーター』のシナリオそのままに、ドゴールがアルジェリアの自治を口にしはじめた。フランスの植民地政策の一大転換が、この映画のころから動きはじめたことに誰が気づいていたであろう。

その名作を生んだ鬼才ルイ・マル監督の妻が、キャンディス・バーゲンである。この女優にも、現代人の多くが魅せられた。自由と解放のシンボルとして、また気骨のある一女性として。

以上の映画物語は、現代人にとってハーメルンの笛である。子供たちが笛の音に魅せられていずこともなく誘惑され、どこかへ向かって歩いてゆく。その先には断崖があるとも知らないのだ。

いつの時代にあっても、スクリーンの裏に別の人物が隠れていることに、人びとは気づきようもない。ジャンヌ・モローの唇、マイルス・デーヴィスのインプロヴィゼーション――即興、キャンディス・バーゲンの知性……映画ファンにとっては、これで充分だからである。しかし、ルイ・マル監督の兄はジャン＝フランソワ・マルといい、投資銀行の社長のポストにあった。それが〝赤い楯〟一族の「レーマン・ブラザース・インターナショナル」であった。

この銀行は、日露戦争の資金を調達したジェイコブ・シフの「クーン・レーブ商会」と合併し、「レーマン・ブラザース＝クーン・レーブ」となったのち、今日では単に「レーマン・コーポレーション」と社名を変えているマーチャント・バンカー。このロスチャイルド家の国際的事業を担当する銀行で、社長の座にあったマルは何をしてきたのであろうか。

ルイ・マル監督の一族は、フランスで砂糖と鉄工業を営む有数の実業家で、〝赤い楯〟の「ラザール・フレール」の閥閥になる。その事実と、いま述べたような映画における作品の出来、不出来とは無関係であろうか。一九八六年にチェルノブイリ原子炉が爆発し、ヨーロッパ全土に死の灰が降り注いだとき、フランスではその危険性がまったくないという風説が流され、フランスだけは食品が安全であるという偽りの証明までなされたのは、実はこの食品産業の支配者の意向によるものであった。

その風説を流す作業は、新聞・テレビ・雑誌などのジャーナリズムの手に委ねられたが、この世界で、ルイ・マル監督を生んだ母フランソワーズ・ベギンの一族が、フランス最大の砂糖メーカー「ベギン・セイ」の経営者で、この一族と結婚したジャン・ドルメッソンという人物が、〝フィガロ〟紙の社長をつとめていたのである。

わが国では〝フィガロジャポン〟が一九九〇年に創刊されたばかりだが、かつてフィガロと密接な関係を持っていたのが、死の商人ザハロフであった。フランス最大の石油エネルギー・グループ「シュルンベルジェ」一族もフィガロの最高幹部であった。

こうしてある人間集団がニュースを創作し、部外者には手の出しようのないジャーナリズ

ムという化け物が、ある時には美麗な装いと軽妙なメロディーをもって大衆と呼ばれる集団に作用しはじめる。個人が消滅し、意志の力を奪われてゆく。このジャーナリズムの元締めが、エネルギー産業と食品産業の最大の支配者であれば、どのようにでも国策を動かすことが可能になる。

映画を見る限り、キャンディス・バーゲンやジャンヌ・モローを指弾する口実はどこにもない。ある一族にとって、彼女たちは魅力一杯に振舞っていればよいのだ。余計なところで口出しをしてくれるな、という暗黙の了解が成立している。

続いて次のようなことが起こった。

今村昌平監督の『黒い雨』が、一九八九年五月のカンヌ映画祭に出品された。全世界が原子力産業に疑いの目を向けた時期に製作され、内容は広島への原爆投下後の物語を扱う重厚なもので、映画祭の観客を魅了しつくした。グランプリの最有力候補と目されたが、世論がこの社会問題に鋭い発言を寄せ、多くの市民が世界の各地で取り組みを見せている絶好の公開時期だっただけに、今村監督にとってはまことに時期が悪かった。

商業映画の世界で王座につくフランシス・コッポラが、このときカンヌ映画祭の審査委員長という大役からおりてしまい、本人は栄光に傷がつく事態を避けたのである。この委員長は、どちらへ転んでも歩が悪かった。『黒い雨』にグランプリを与えれば、黒い手が背後から伸びてくる。故意に選外へ落とせば、コッポラの良識が疑われるからである。このような状況のなかで、授賞式の当日、五月二十三日には、急遽引っ張り出されたヴィム・ヴェンダ

ースという人物が審査委員長をつとめ、グランプリは『セックスと嘘とビデオテープ』という不可解な小品に与えられた。場内は、『黒い雨』の受賞をほとんどの人が確信していたため、しばらくは驚きのあまり声ひとつ立てられないほどであった。

皮肉な受賞作の題名である。この物語の嘘をビデオテープで再現すると、ヴェンダース委員長を取り巻く世界が浮かびあがってくる。

その答は、セックス――本書に言う〝閨閥〟である。授賞式の十日前のことであったが、委員長のヴェンダースをはじめとするカンヌ映画祭の幹部たちは、ミッテラン大統領夫人やラング文化相などフランス政界の要人が集まる会議に呼ばれていた。その場で司会をつとめたのが、フランスで人権を守る活動家として知られる弁護士ジョルジュ・キージマンであった。彼自身がミッテラン夫人の財団で理事をつとめ、大統領の側近として活躍してきたが、彼らは特異なグループを形成していた。

カンヌ映画祭に臨んで、自ら〝高級紙〟と名乗るフランスの新聞〝ル・モンド〟が『黒い雨』を酷評し、日本人がおこなった戦争犯罪に言及しながら、第二次世界大戦の歴史を正視するよう求めた。これは、従来のファシズム論議のなかでは、正当な意見である。しかし今村昌平監督が作品のなかで主張したのは、戦争犯罪そのものの告発であった。〝ル・モンド〟が言うように、歴史を正視してみよう。

この新聞社が、南太平洋のムルロア環礁（原地名モルロア）でおこなってきたフランスの核実験を堂々と支持してきたことは、周知の事実である。その核実験によって、黒い雨が南

太平洋の島々に降りそそぎ、「タヒチでは癌と奇形児が激増」という報告が、一九八〇年代に洪水のようにフランス領ポリネシアで出された。しかもこれらの島民はひそかにフランスへ飛行機で送られ、バル・ドグラース軍病院などに収容される惨状であった。

核実験はその後もムルロア環礁で続けられ、遂に一九八五年六月には生物だけを死滅させる中性子爆弾の実験がおこなわれているという事実が暴露され、フランス政府がそれを認めるまでに至った。一帯の島々は、環礁に巨大な地割れが発生し、高波や島全体の沈下のため大量の放射能漏れが起こる事態を迎えたのである。住民が訴えたのは、「私たちはもはや海産物を口にすることができなくなった。人びとは頭痛を訴えながら死んでゆく」という言葉であった。その同じ年の七月十日、今度は環境保護団体のグリーンピースが核実験に抗議するなか、彼らの抗議船〝虹の戦士号〟がフランス軍の手で爆破されてカメラマンが死亡。ところがジャック・シラク首相（一九九五年に核実験再開による全世界の怒りを買った大統領）は、当時、その殺人者である秘密工作員を公然と称讃した。これがすべて、社会主義者ミッテラン政権になってからの出来事であり、夫人のダニエル・ミッテランはその事実を知りながら、全世界に〝人権の重要性〟を説いてまわってきた。これが〝ル・モンド〟の容認する核実験の実態であり、一九九〇年代に入っても核実験は続けられてきた。

このようなカンヌ映画祭の舞台裏にあるセックスと嘘とビデオテープは、実際には次のような話である。

『資本論』を著したカール・マルクスの偶像が地に堕ちる時代を迎えた今日だが、『黒い雨』

系図37 フランス社会主義のセックスと嘘とビデオ・テープ

カール・マルクス
【系図83】
Karl Marx

ラウラ・マルクス
Laura Marx

同志

ラファルグ
Paul Lafargue

ゲード
Jules Guesde

社会主義
建設

Boris Volpert

Louise Guesde

シュネーデル兵器創業者
ユージェーヌ・シュネーデル
Eugène Schneider

Henri Schneider

Eugène Schneider Ⅱ

★★ジョルジュ＝ピコ
François Georges-Picot
Charles Georges-Picot

Geneviève Georges-Picot

Jacques Bardoux
Marguerite Schneider

ロスチャイルド家

Paul S-Brantes

Guy F-Lucinge
Ferdinand F-Lucinge

資本主義の総本山
金融王ネイサン
Nathan Rothschild

カール
Carl Rothschild

Mayer Carl Rothschild

François Broglie
Amédée Broglie

Bertha Rothschild

Alexandre Berthier

Liliane Volpert
社会主義と資本主義
代表者の結婚
Charles Schneider

資本主義
ジスカールデスタン大統領

社会主義
ミッテラン大統領

側近

ダニエル・ミッテラン財団理事
カンヌ映画祭・影の支配者
ジョルジュ・キージマン
Georges Kiejman

Laure Broglie

★スエズ運河会社社長
Jacques Georges-Picot
Edmond Giscard d'Estaing

Valéry Giscard d'Estaing

Marthe Bardoux

François S-Brantes

Anne S-Brantes

Aymone F-Lucinge
Béatrix F-Lucinge

Guy Broglie

Amédée Broglie
Jacques Broglie

Marguerite Berthier

S-Brantes	は
Sauvage de Brantes	の略
F-Lucinge	は
Faucigny-Lucinge	の略

を軽蔑したカンヌ映画祭の隠れた支配者キージマンと偉大なるマルクスが、フランスの軍需産業・核兵器産業・原子力産業の総本山「シュネーデル」の一族によって、信じ難い系図37をつくっていた。死の商人ザハロフが大いに貢献した兵器会社シュネーデルとである。

カール・マルクスには、ラウラという娘があった。フランスの社会主義者ポール・ラファルグ、つまり現代の社会主義者ミッテラン大統領の生みの親は、マルクスと友好を深め、その次女ラウラと結婚した。こうして娘ムコとなったラファルグは、マルクスとエンゲルスの著書を次々とフランス語に翻訳して社会主義の普及につとめたが、そのとき手を組んだのが「人権」という雑誌の編集者ジュール・ゲードであった。ゲードはマルクス一家の最も信頼できる人物となり、ラファルグと共に労働党を結成し、やがて社会党を創立するなど、資本主義の牙城をおびやかす重要人物となっていった。

これが今世紀初頭のフランスであった。その当時、資本主義の牙城に君臨していたのは誰であったか。ロスチャイルド家は、ゲードを放任したのであろうか。マルクスが一八四三年に発表した論文は「ユダヤ人問題」だったが、この頃からヨーロッパ全土に再燃しはじめたのがユダヤ人問題で、特に前世紀末から今世紀初頭にかけてフランス政界を揺るがした最大の社会問題は、ロスチャイルド家に深くかかわるユダヤ人の冤罪事件――ドレフュス事件――であった。

ロスチャイルド家は、すでにマルクス亡きあとの後継者ゲードを自らの牙城に取り込む工作に着手していた。その孫娘リリアンに白羽の矢が立てられ、彼女は軍需産業の総本山シュ

ネーデル家の四代目シャルルと結ばれたのである。

革命家マルクス・ファミリーは、こうして自らの参謀を軍国主義者に提供することになり、この時代から早くも、社会主義者の内部では暴力的な部分が資本主義者に密通するという今日の構造が誕生してしまった。問題は、この家系図から、現代のミッテラン大統領の側近ジョルジュ・キージマンが誕生し、その人物が現代においてカンヌ映画祭の陰の支配者となったこと、そしてミッテランの前任者ジスカールデスタン大統領本人が誕生したことにあった。

そしてこの系図に欠かせないのが、本書の主人公ロスチャイルド家の存在である。この系図は、社会主義者と資本主義者が交配するという興味深い図を描き、その中心に兵器が存在する。その両者が闘争を繰り返した目的は何であったのか。

〝ル・モンド〟紙に倣って、さらに深く歴史を正視してみる。

フランスが日本人の戦争犯罪を非難したのは正当なことである。では、核実験場はなぜ現代でも、フランス領ポリネシアにあるのか。フランス人は現代でも重大な犯罪に走り、狡猾なジャーナリズムの筆でその〝植民地における人権侵害〟を隠し続けてきたのである。

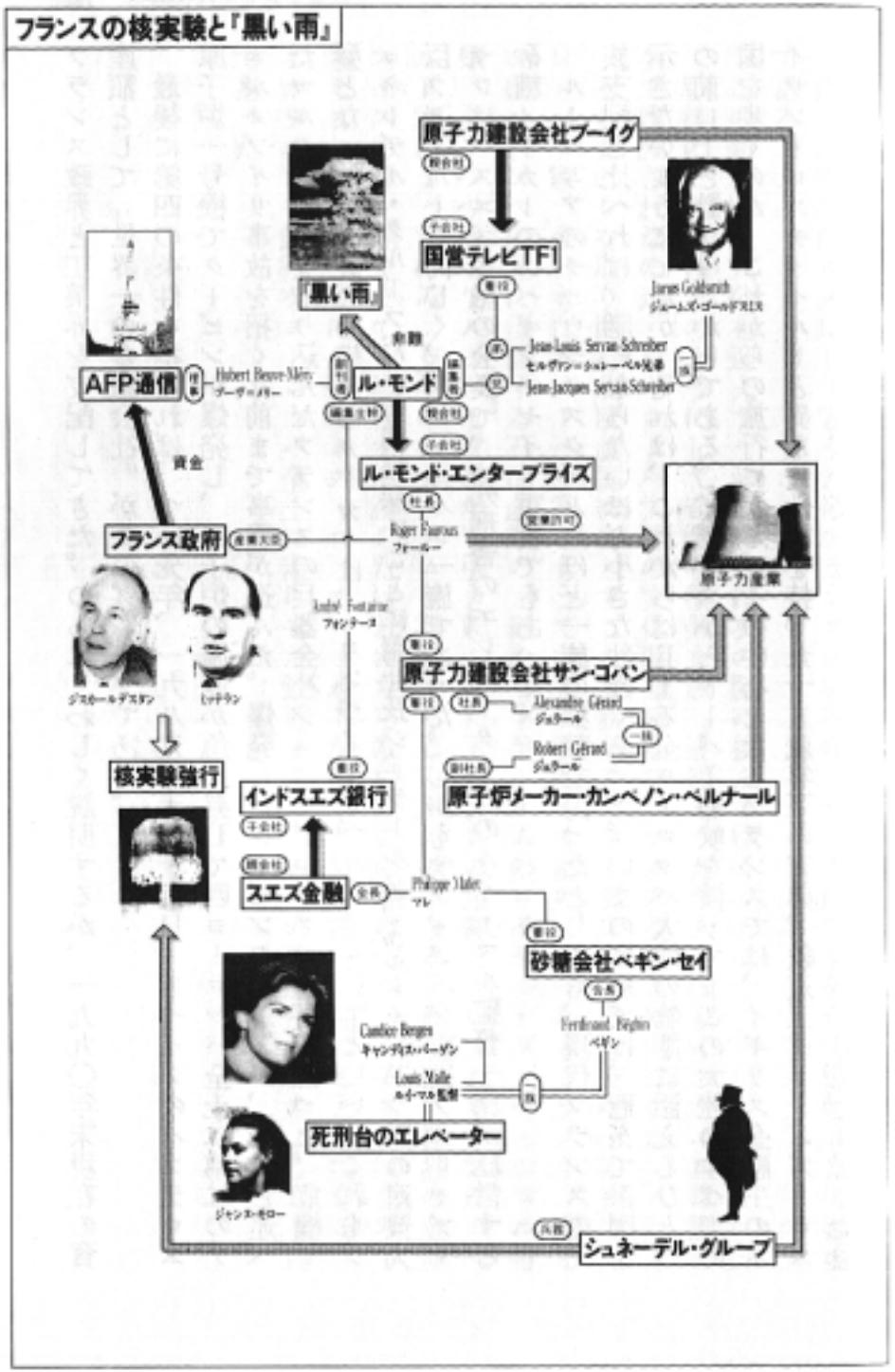
しかし、その犯人はフランス人すべてであろうか、という疑問がある。むしろフランスを支配するひと握りの人間集団であるという可能性が高い。

〝ル・モンド〟は高級紙と称しているが、優雅さを振舞っているこの赤新聞の創刊者ブーヴ＝メリーは、フランス政府の資金で運営されてきた通信社ＡＦＰの理事をつとめ、外電記事にも圧力を加えてきた。そのブーヴ＝メリーが右腕としていた編集者ジャン＝ジャック・

セルヴァン＝シュレーベルは、背ビレ四枚ジェームズ・ゴールドスミス一家の重鎮つまりロスチャイルド家の一員であった。したがって、『黒い雨』を攻撃した〝ル・モンド〟は〝赤い楯〟だったのである（〝フランスの核実験と『黒い雨』〟の図参照）。

ロスチャイルド家が『黒い雨』を気に入らなかった理由は、まず第一に、〝ル・モンド〟編集長の弟ジャン＝ルイはフランス最大の視聴率を誇る国営テレビ〝TF1〟の重役であったが、このテレビ局が民営化によって原子力建設会社「ブーイグ」の傘下に入ったことにある。第二に、〝ル・モンド・エンタープライズ〟の社長フォールーは、ミッテラン政権の産業大臣をつとめ、原子力産業の中枢である機械建設会社「サン・ゴバン」の重役室から登場した人物であった。

第三に興味深いことがある。〝ル・モンド〟の編集主幹をつとめるフォンテーヌは、「インドスエズ銀行」の重役であった。インドスエズとは、インドシナとスエズ、つまり今日のベトナムとエジプトを侵略したフランス植民地のシンボルである。その戦争成金が、現在の一九九〇年代にあって、〝ル・モンド〟編集室のキャップだという。これはどこかで耳にしたような物語である。『死刑台のエレベーター』の冒頭シーンで殺された戦争成金カラとは、皮肉にも彼ら自身の姿を描いたシナリオだったのだ。日本人がインドシナを占領する前の侵略者がフランス人で、そのあと第二次大戦後は再びフランスが侵略し、次いでアメリカ人によるベトナム戦争へと発展してきたインドシナ――そこに建てられたインドシナ銀行は、やがてフランス四大金融グループのひとつとしてインドスエズ・グループを形成し、今日まで



フランス政界と工業界を支配してきた。のちにくわしく説明するが、一九九〇年末現在の資産額として〝世界一の金融会社〟がこのグループである。

最後に第四の条件を挙げれば、つい先年、一九八九年十月十九日、スペインのバンデロス原子炉一号機でタービンが爆発し、原子炉の温度が急上昇して西ヨーロッパ全土に第二のチェルノブイリ事故を招く寸前まで事態が進んだ。爆発したタービンの製造者が、先ほど述べたマルクス一派を取り込んだフランスの兵器会社シュネーデル・グループであった。危機一髪となった原子炉の心臓部のメーカーは、「カンペノン・ベルナール社」といい、これもシュネーデル・グループだが、興味深いことに副社長ジェラールが、〝ル・モンド〟系の産業大臣フォールーと同じく、サン・ゴバン一族であった。しかもサン・ゴバン重役フィリップ・マレは、スエズ金融の会長で、『死刑台のエレベーター』のルイ・マル監督一族が経営する砂糖メーカーの「ベギン・セイ」重役でもあった。

ルーマニアのチャウシェスクがどれほど一族の独裁を誇ったとしても、現代フランスの一族支配と比べれば、話にならないほど小さな独裁であった。いまの図解では、敢えて系図を示さないようにしたが、それは、これからはじまる全ヨーロッパ大陸の物語に添えるひとつの前口上と謎かけだからである。イギリスからドーバー海峡を渡って、この大陸のすべての国を歩くのが、これからの旅行になる。その中心となるフランスでは、イギリス金融王のネイサン・ロスチャイルドと異なる性格を持った十五歳年下の末弟、鉄道王ジェームズ・ロスチャイルドが〝赤い楯〟の帝国を築いた。それが今日では、崩すことが不可能なほどの金融

支配と工業支配を達成し、とりわけフランスの核兵器と原子力産業を動かす怪物となったのである。

この新しい主人公を迎えて、われわれは次の謎に挑んでゆく。

戦後のドイツはどのようにして奇蹟の復興を成し遂げ、ユダヤ人の国家イスラエルは誰の手で建設されたのか。ヨーロッパ大陸の文化圏を誇るフランスの実態とは何なのか。

そのまわりを取り囲む北欧諸国にあって、一家族がスウェーデンの半分を支配するヴァーレンベリ家、今日もなおノーベル賞をもって世界に君臨する謎のノーベル・トラスト、あるいはフランスの北に位置する石油産業の元締めロッテルダムのロイヤル・ダッチ・シェル帝国、北アフリカのアルジェリア戦争を引き起こした天然ガスの宝庫……いずれもロスチャイルド家によってのみ、支配のメカニズムを証明することが可能になる。最後に、世界の金庫スイスの扉を開くまで、現代を追跡しなければならない。この扉は、ジェームズ・ゴールドスミスならぬ、今度はジェームズ・ロスチャイルドが握った鍵を使って開くことができる。

オリエント急行をヨーロッパ全土に走らせた鉄道王ジェームズの物語は、次のようなものであった。

会」の一族でもあった。本書で初めて登場するドレクセル家は、アメリカのペンシルヴァニア州で最大の富豪となり、その本拠地フィラデルフィアではすべての銀行の資産を合計してもドレクセル家の財産にはおよばなかったという天文学的資産家であった。ドレクセル・モルガン商会がロスチャイルド家から融資を受け、その資金でアメリカの国債の四パーセントを買い取り、これを売って十九世紀に五百万ドルという途方もない利益を計上した物語は、アメリカ財閥史上の語り草となっている。その当主アンソニー・ドレクセルはもともとドイツ・オーストリア地方の出身で、死地にもバイエルン地方を選んだほどであった。われわれよりずっと前に、ロスチャイルド家はこの系図を描きながら世界を動かしていたのだ。そうでなければ、事件を調べてこれほど具合よく全員が登場するはずはない。

これまで系図を示さなかった詩人ハインリッヒ・ハイネ、社会主義の父カール・マルクス、ヨーロッパ最大の電機メーカー「フィリップス」の創業者アントン・フィリップス、作曲家フェリックス・メンデルスゾーン、この著名な四人のユダヤ人も、無数の姻戚関係によってフランクフルトのロスチャイルド家と閨閥をつくるひとつのファミリーであったことが明らかになる。

それを示すのが、系図83〝ドイツとハプスブルク帝国の歴史的なロスチャイルド一族〟である。

〝フランス社会主義のセックスと嘘とビデオ・テープ〟（第2巻系図37）のマルクス家は、『資本論』の原点が当初からロスチャイルド家にあったのだ。ソ連の共産主義の崩壊、それ

は共産党官僚機構の表面的変貌にすぎないものであって、これからのロシア帝国については、別の視点が必要である。鉄道王ジェームズの屋敷に詩人ハイネが出入りし、メンデルスゾーンがハンナ・ロスチャイルドの音楽教師であった理由も、この系図が明らかにしている。オイルショックの元締めオランダで、フィリップス社が第3巻の〝さまよえるオランダ人〟の図に主役として登場し、不可思議なロスチャイルド財閥を構成していたのも、血縁関係によるものであった。

しかしここで、さきほど示した系図82（主にドイツ帝国主義やナチス時代を動かしたクルップ、ジーメンスなどの巨大財閥）と系図83（ドイツのユダヤ財閥）が、まったく同じ人脈であることに注意を払っていただきたい。二種類の系図は、ロスチャイルド家以外は重複していないようだが、財閥要人のあいだをつなぐ家族の名前を追ってみれば、無数に重なり合う系図82と系図83なのである。一方はナチス、一方はユダヤ人。つまり、解けないパズルである。

そのパズルを解いてくれるのが、オーストリア・ハンガリーにおいてハプスブルク帝国を支配した特権階層のユダヤ人である。ユダヤ人がまだ排斥されていた時代にも、系図83のユダヤ人アルンシュタイン家やペレイラ家は、女帝マリア・テレジアを動かすウィーンの大勢力家として、『会議は踊る』のウィーン会議を裏であやつり、のちに、その資金がロスチャイルド家に集約されることになった。

特筆すべき実業家としては、フィリップス電機以外にも、ジーメンスのライバルとなった

系図83 ドイツとハプスブルク帝国の歴史的なロスチャイルド一族

ウィーン・ロスチャイルド銀行　創業者

サロモン・ロスチャイルド

Salomon Rothschild
Solomon Cohen
Hannah Cohen

Anselm Rothschild
Harriet Cohen
【Waag】
John Wagg

Albert Rothschild
Emily Wagg
Henry Merton

「資本論」の著者

社会主義の父
カール・マルクス

【系図37】

金融王ネイサン

Nathan Rothschild
Heinrich Marx
Henriette Presburg

Karl Marx
【愛称 Jenny】
Johanna Westphalen
【愛称 Lisette】
Luise Westphalen
Adolf Krosigk

ドイツ最大の金属財閥

メタルゲゼルシャフト　創業者

ヴィルヘルム・メルトン

Wilhelm Merton
Alfred Löwenstein-WF
Ernst Löwenstein-WF
Ludolf Veltheim
Werner Veltheim
Isidore Krosigk

カール・マルクス

ヨーロッパ最大の電機メーカー

フィリップス　創業者

アントン・フィリップス

Sophie Presburg
Lion Philips
Frederik Philips
Frederik Anton Philips

PHILIPS

★アルンシュタイン家
Nathan Adam Arnstein
★イツィッヒ家
【Itzig】
Fanny Itzig
Bella Itzig
★サロモン家
Jehuda Salomon
Solomon
Arnstein
★ペレイラ家
Heinrich Pereira
Henriette Arnstein

ハプスブルク帝国の
★勢力家集団

ハプスブルク家の大領主
★エステルハジー家
György Esterházy
Dénes Esterházy
August Pereira-A

Charles Rohan-Chabot
Louise Rohan-Chabot
György Esterházy
Géza Esterházy
Flora Pereira-A
Peter Pirquet-C

ウィーン・クレディタンシュタルト　頭取

ルイス・ロスチャイルド

Louis Rothschild

Viktoria Wylich-L
Wanda Wylich-L
Richard Merton
Elisabeth Löwenstein-WF
Ludolf Veltheim
Josias Veltheim
August Veltheim
Dorothea Veltheim

Alain Rohan-Chabot
Jehan Rohan-Chabot
René Rohan-Chabot

László Esterházy
Anton Eiselsberg
Agnes Pirquet-C
Agnes Esterházy
Heinz Conrad-E
Margarethe Eiselsberg

Conrad-E	は
Conrad von Eybesfeld	の略
Löwenstein-WF	は
Löwenstein-Wertheim-Freudenberg	の略
Pereira-A	は
Pereira-Arnstein	の略
Pirquet-C	は
Pirquet von Casenatico	の略
Wylich-L	は
Wylich und Lottum	の略

ドイツ出身のロスチャイルド一族
グッゲンハイム家　クーン家　レーブ家　オッペンハイマー家
シフ家　カーン家　シュテルン家　ワイスワイラー家
シュトラウス家　ワーバーグ(ウォーバーグ)家　……

系図83-2

大銀行家
ハイネ一族

詩人
ハインリッヒ・ハイネ

Heinrich Heine
Gustav Heine-Geldern — Maria Heine-Geldern
Albertine Heine
Paul Mendelssohn-B — Heinrich Sizzo-Noris

Abraham Mendelssohn
Lea Salomon

作曲家
メンデルスゾーン

Felix Mendelssohn-B

Clara Salomon
【Herz】
Moses Hertz
Adelheid Hertz

【ナポリから
フランクフルト家へ養子】
Mayer Carl Rothschild
【ナポリから
フランクフルト家へ養子】
Wilhelm Rothschild

男子後継者なく断絶した
フランクフルト・ロスチャイルド家のアムシェル
Amschel Rothschild
Carl Rothschild

Elisabeth Gaudlitz
Karl Mangoldt — Georg Mangoldt

総合電機会社

ドレスナー銀行 監査役会長

AEG 創業者

フランツ・アンドレー
Franz Andreae
Edith Rathenau

エミール・ラーテナウ
Emil Rathenau

暗殺されたユダヤ人外相
ヴァルター・ラーテナウ
Walter Rathenau

Gustav Mangoldt
Agnes Reiboldt
Erich Mangoldt-R
Ferdinand Puttkamer
Fritz Puttkamer

James Rothschild — Alphonse Rothschild — Béatrice Rothschild
Abraham Fould — Eugène Fould — Léon Fould
【Bénédict】
Beer-Léon Fould — Benoit Fould — Thérèse Ephrussi
Hélène Oppenheim — Maurice Ephrussi

サロモン・オッペンハイム商会 創業者

ケルン商業会議所で
最初のユダヤ人
サロモン・オッペンハイム
Salomon Oppenheim

ディスコント銀行【ベルリン】 創業者親子

ダヴィット・ハンゼマン
David Hansemann — Adolph Hansemann
Ferdinand Kusserow — Ottilie Kusserow
Eveline Oppenheim
Simon Oppenheim — Eduard Oppenheim

Otto Jordis-L — Johannes Jordis-L
Camillo Jordis-L — Camilla Jordis-L
Hermann Gemmingen — Ernst Gemmingen
Erich Gemmingen
Emma Sizzo-Noris
Maria Sizzo-Noris — Maria Lemprich
Erwin Lemprich

メンデルスゾーン

Armand Gramont — Emma Gramont
Peter Arenberg
Agénor Gramont — Louise Arenberg
Margaretha Rothschild — Marguerite Vogüé
Louis Vogüé

ドイツ・
ロスチャイルド家の後継者
Minna Rothschild
ゴールドシュミット＝
ロスチャイルド家
Albert Goldschmidt-R
Maximilian Goldschmidt
Hans Mangoldt-G
Elsbeth Schulenburg
Georg Finck-F
Wilhelm Finck-F — Friedrich Finck-F
Ursula Andreae
Karl Mangoldt-R
Hermann Puttkamer — Dorothea Puttkamer
Heinrich Puttkamer — Hasso Puttkamer

Finck-F	は
Finck von Finckenstein	の略
Goldschmidt-R	は
Goldschmidt-Rothschild	の略
Jordis-L	は
Jordis von Lohausen	の略
Mangoldt-G	は
Mangoldt-Gaudlitz	の略
Mangoldt-R	は
Mangoldt-Reiboldt	の略
Mendelssohn-B	は
Mendelssohn-Bartholdy	の略

戦後西ドイツ復興の
最大の金融支援者

サロモン・オッペンハイム商会 経営者

現代ドイツ大富豪
オッペンハイム家
Friedrich Oppenheim — アルフレート・オッペンハイム Alfred Oppenheim
Simon Oppenheim
Eberhard Oppenheim — マンフレート・オッペンハイム Manfred Oppenheim

AEG創業者のラーテナウ一族があり、戦後のドイツ復興資金を一手に引き受けたサロモン・オッペンハイム商会、ドイツでロスチャイルド家の断絶後も事業を延命させたディスコント銀行の創業者ハンゼマン親子がある。みな一族であった。

本書ですでに何度となく登場したドイツ出身のロスチャイルド・ファミリーの名前――グッゲンハイム、クーン、レーブ、シフ、カーン、シュテルン、ワイスワイラー、シュトラウス、ワーバーグ、オッペンハイマー――をこの系図に書き加えれば、現代ドイツの底流に動く資本の大きさを改めて理解されるであろう。

ドイツと聞けば、フランスやイギリスに敵対する存在と考えがちだが、実際のヨーロッパをロスチャイルド家の広大な領地と考えれば、ほとんどの社会問題の謎を解くことができる。この領地のなかで、ヒットラーの反乱が起こされた。それが第二次世界大戦の悪夢であったと考えられる。

バイエルン王室には、鉄鋼・原子力・重工業のティッセン家が一族となり、またバイエルンで郵便事業をはじめたトゥルン＝タクシス家が当然のように閨閥をつくってきたことを知れば、南ドイツのボスとして君臨してきた悪名高いシュトラウスが何者であるのかと身許を知りたくなる。

ロスチャイルド家の代理人は、時として突然に大金持になり、いきなり大政治家になってゆく。フランツ・シュトラウスもその口であった。人名録や文献には〝肉屋の息子〟シュトラウスと書かれているだけだ。父親は後年のゲシュタポ隊長ヒムラーからにわとりなどを買

い入れていた人物、その肉屋の向い側にある写真屋に足繁く通っていたのがアドルフ・ヒットラーであった。しかし彼が四十歳でいきなりドイツで原子力大臣になった同じ年に、問題のローリンソン司法長官の伯父グレイソンがイギリス原子力公社の最高主任官に就任し、ウィンズケール再処理工場を支配しはじめたのである。〝シュピーゲル事件〟の経過を注意深く分析していただければ分る。

最近では一九八六年十一月に発覚した南アへの〝潜水艦の設計図〟密輸事件があった。世界的に南アへの輸出が禁止されているときに、シュトラウスが音頭を取って、世界一の性能を誇るドイツ製U209型潜水艦の図面が南アに手渡された。筆者の手許には、南アのボタ首相とシュトラウスが実に親しげに談笑している写真がある。その説明文は、〝肥えた友達〟となっているが、これが載っている長大なレポートの表紙には〝ウランゲート〟と題して、コール首相が放射性廃棄物のドラム缶を見つめる写真が大きく掲載されている。イラン・コントラ事件はイランゲートと呼ばれ、ドイツの核スキャンダルはウランゲートと呼ばれてきた。コールがここに登場するのは、次のような理由による。

コール首相は南アへの経済制裁に早くから反対を表明し、アパルトヘイトを支援してきた人物であった。自らの不正献金事件では八六年に公然とシラを切って国民を驚かせ、八八年にはまだ東西対立が続くなかでソ連に原子炉輸出のためモスクワに乗り込み、シュトラウスと絶えず暗い世界で行動を共にしてきた。

一九九〇年十月三日の歴史的な東西ドイツ統一がごく静かにおこなわれ、花火が空に舞っ